

学校教育目標	未来を拓き 人間力豊かに 学び続ける高見っ子の育成
--------	---------------------------

a ミッション	〇小中連携教育を基盤としたカリキュラム・マネジメントの推進による主体性・表現力の育成	a ビジョン	人間の根っこを育てる学校づくり
---------	--	--------	-----------------

尾道市立高見小学校

評価計画				自己評価						学校関係者評価			改善計画			
b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月		1月		h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価			l コメント	m 改善案
					g 達成値	g 達成値	g 達成値	g 達成値				イ	ロ	ハ		
気付き、考え、行動する子供の育成 (主体性・表現力・関わり合い)	関わり合いを通じた主体的な学びの確立 児童が自信を持って科学的に表現する力の育成。	科学的に表現できる児童を育成するために、交流活動を充実させた教科研究を行う。	算数科各単元末の振り返りにおいて表現したもののB評価以上児童の割合	75	79	78.1	104	A	<ul style="list-style-type: none"> 全学級のノート交流（職員が担当学級の児童のノートを持ち寄り、意見を出し合う）に取り組み中で、表現させたい内容や方法についての理解が進んだ。 基礎的・基本的な内容の定着について児童間の格差が大きく、表現活動にも影響している。 主体性や意欲を支える自己存在感・自己肯定感の涵養に取り組みが必要と考えられる。 	3	0	0	〇達成度が高く、よいと思います。 〇積み重ねが大切な教科なので、しっかりと基礎の力をつけることが大切です。 〇小規模校のよさを活かして、引き続き「表現力」の育成に取り組んでほしい。	<ul style="list-style-type: none"> 「ノート交流」などにより、効果的な指導法や研修・研究の成果を職員間で共有し、日常の指導に生かすことができようとしている。 交流のねらいを明確化したり、交流のイメージを具体的に共有したりして、引き続き「表現力」の育成に取り組む。 		
		基礎的・基本的な学力を高めるために、補充学習を行う。	国語科・算数科単元末テスト（知識・技能）における平均通過率	85	国語 86.0 算数 90.1	国語 87.4 算数 86.5	国語 103 算数 102	A	<ul style="list-style-type: none"> 授業での姿を踏まえた補充的な活動が適切になされている単元は通過率も向上する傾向にある。 当該学年以前の内容が定着していない児童への対応に課題が残る。 	3	0	0	<ul style="list-style-type: none"> 〇国語や算数が理解できているという思いで次の学年に進んでいけるのは、子供たちにとって幸せなことだと思います。まずは基礎的なことだけでも！といつも願ってきました。 〇これも達成度が高く、よいと思います。 〇ICTの活用が児童にも先生にもよい影響があると思いますので、どんどん使ってもらったらよいと思います。 〇目標値を超えており、子供たちに細かく指導されていることが分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「個に応じた指導」について引き続き研修・研究の場を設け、教師が個人の状況を的確に把握して効果的に対応できるようにする。 学力調査（「標準学力調査」）の結果分析に基づき、焦点を明らかにしたうえで、統一的で連続的な取組を進めていく。 児童が意欲的かつ主体的に基礎学力を身に付けていけるよう、授業に加え、補充学習にもICTの活用を始めとする様々な工夫を取り入れ、粘り強く指導していく。 		
自己を振り返り、よりよく生きようとする態度の育成	人との関わり合いを通じて、相手意識をもった人間関係の形成 自らの生活を振り返り、よりよく生活しようとする態度の育成	「しまっこしぐさ」を基盤とし、発達段階に応じたあいさつを通して自己を表現できるようにする。	毎月のあいさつ週間カードの「振り返り」に、「相手意識をもったあいさつ」に関する記述ができた児童の割合	80	72	77	96	B	<ul style="list-style-type: none"> カードの作成・記入は児童・教師の双方の意識付けに効果があった。 教師が具体例を示したり、児童を肯定的に評価したりすることで記述を促すことができた。 あいさつ週間だけでなく、日常の学校生活や地域での生活へも「相手意識を持ったあいさつ」を広げていきたい。 児童会を中心とした活動に取り組むことなどをとおして、自分たちの生活を自分たちでよりよくしていくようとする意識を高めたい。 	3	0	0	<ul style="list-style-type: none"> 〇どのくらい教師間で日頃何気ない話や子供の話ができていたかがとても大切だと思います。それが子供たちにも反映してくると思います。 〇大人になってもあいさつはとても大切なので、しっかりと習慣化しなければならぬと気づかされた。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童会活動の活性化を図り、代表委員会などを通して各学年の意見を交流し、児童が進んで活動できるようにしていく。 継続的な声かけや、地域・保護者との連携をとおして、あいさつ週間だけでなく、日常の学校生活や地域での生活へも「相手意識を持ったあいさつ」を広げていく。 		
		成果を実感できるよう、生活上のめあてを明確にし、それを意識した振り返りをさせる。	生活リズムチェック表において、早寝・早起きを達成できた児童の割合	80	90	87	110	A	<ul style="list-style-type: none"> 前回同様、生活リズムチェック期間を設けたことで起床・就寝時刻やメディアの時間を意識して生活することができていた。 週末はメディアの時間の増加に伴い、就寝時刻が遅くなっている実態がある。 保護者も生活リズムチェックに関しては非常に協力的であるが、週末の就寝時刻の遅れについては容認している家庭もある。また、目標が達成できていない児童が固定化されていることが課題である。 	3	0	0	<ul style="list-style-type: none"> 〇チェック表はどれも好きになれなくて… 〇子供同士のスマホ問題はどうなっているのか気になります。いじめが発生する大きな要因です。 〇目標達成が難しい児童は保護者にも協力をお願いしてみるのが一番効果がありそうです。 〇コロナ禍を経て児童の健康への意識が高まったように感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> 今後も保護者や保健指導でメディアとの付き合い方、睡眠時間の大切さなどについて呼びかける取組を継続する。 生活実態の改善について、個別の指導に加え、実態に応じた保護者への声かけ、依頼など、保護者と協力しながら取組を継続していく。 		
		異学年等と外遊びをする機会を作り、友達と体を動かす楽しさを感じさせることで、運動好きな児童を増やす。	体を動かすことに肯定的な児童の割合（児童アンケート）	80	86	87	107	A	<ul style="list-style-type: none"> 異学年間の交流の場を設定し、お互いに教え合うことが運動の仕方を知る一つのきっかけになった。 遊び感覚で体を動かすことで、体の使い方や動かす方を身に付けることに近づくことができた。 体力を向上させることの必要性を感じてはいるが、「疲れ」に対する否定的な感情や苦手意識が拭えない部分がある。 	3	0	0	<ul style="list-style-type: none"> 〇子供は遊びの天才だと思っていましたが、今はどう仕組みづくりが大切なのですね。続けて頑張ってください。 〇大きくない学校ですと、異学年との関係は同学年との関係と同じくらい重要です。積極的に交流させてもらえるとうれしいです。 〇アンケートの結果から、児童の肯定的な評価が高かったことが分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> アンケートでは何らかの成功体験について記述している児童が多いことを踏まえ、授業等において「できた」という達成感を感じさせる工夫をする。 体育の時間との関連を図る、教職員と一緒に外に出て活動するなどの地道な取組も継続していく。 児童会活動や学級の係活動を生かし、児童が主体的に運動に取り組めるようにしていく。 		

【自己評価 評価】

A：100≦（目標達成）
C：60≦（もう少し）<80

B：80≦（ほぼ達成）<100
D：（できていない）<60

【外部評価】 イ：自己評価は適正である。ロ：自己評価は適正でない。ハ：わからない。